

## 松下幸之助の志

命知は「A Better Life, A Better World」の原点

### 産業人の使命は貧乏の克服

1932年（昭和7）5月5日、創業者は当時の全店員（幹部社員に相当）168名を大阪の中央電気倶楽部に集め、当社が将来に向かって果たしていくべき真の使命を明示した。

「最近、ある宗教を見学視察した。そして、その繁栄、その盛大ぶりに痛く心を打たれた。そして、その宗教の使命というものはどこにあるのかということを考えてみた。そういうことも一つの動機となって、われら生産人には、その崇高さにおいて宗教に劣らない大きな使命があることを知ったのである。

産業人の使命は貧乏の克服である。社会全体を貧より救って、これを富ましめることである。水道の水は加工された価のあるものであるが、道端の水道水を通行人が飲んでもとがめられることはない。それは、その量が豊富で安価だからである。松下電器の真の使命も、物資を水道の水のごとく安価無尽蔵に供給して、この世に楽土を建設することにある」

### 250年かけて楽土の建設を目指す

創業者は、この真使命を、250年かけて達成しようという壮大な構想をあわせて発表した。

1932年5月5日以後の250年間に10節に分け、各節の25年間にさらに3期に分ける。第1期の10年間は建設時代、次の第2期の10年間は、建設を続けながら活動する活動時代、そして最後の5年間は建設と活動を続けながら世間に貢献する貢献時代とするのである。

「以上の第1節の25年間は今日出席しているわれわれの活動する活躍期間である。そして第2節以後は、われわれの次代の人たちが、同じ方針をもってこれを繰り返し、10回250年で世の中を物資に満ち満ちた、いわゆる富み栄えた楽土にしようとするものである。

使命達成の第一段階は、この250年をもってひとまず終了する。しかし、第二段階である次の250年に至っても、この姿は変わらず、さらに高い理想に向かって邁進するであろうと思う。そして、その時の理想に合致する方途は、その時の人たちによって、われわれの伝統を生かして、さらに立案されるであろう」

## 感激の命知元年5月5日

当社の真使命を明示した所主告辞やその使命達成のための遠大な250年計画に、参加者は全員が感激し、興奮して次々に壇上で決意を表明、会場は興奮のるつぼとなり、午前10時に開会した式典は、午後6時に至ってようやく閉会した。

創業者は、当社が真の創業に入る記念すべきこの5月5日を創業記念日に制定し、この年を創業命知第1年とした。「命知」とは、使命を知ったということである。

当日、式典に出席した幹部は、後年、次のように語っている。

「ごついことを言われたという感じでした。なにしろ250年計画ですから。その250年を10節に分け、さらに1節の25年を3期に分けるといふ。あの時は、みんな感激しました」

「創業者もあの時は、4時間くらいぶっ続けに話されました。そのあと一人ずつ感想を述べるということになって、舞台の両袖から下の方まで並んで順番を待ちました。もう何かしゃべらないと自分の興奮の持って行き場がない、という雰囲気でした。演壇の前に立った時には感激し、興奮して、“バンザイ”と叫んだだけで降りた人もいました」

「創業者のおっしゃったことで皆が一つになった。“ともにがんばろう”という、何か心の中から湧いてきた雰囲気だった。つくられたものじゃない、自然に湧きあがってきたものでした」

この時から、使命を自覚した従業員一人ひとりの自発的な活動意欲が、一つの目的に向かう全員一体の力になり、当社は「線路を走る列車のように」、使命達成への軌道に乗って、未来への着実な力強い発展を始めた。

参考：第一回創業記念式における所主所感、社内誌「松風」1973年5月号、1981年2月号